

life

くらし



健

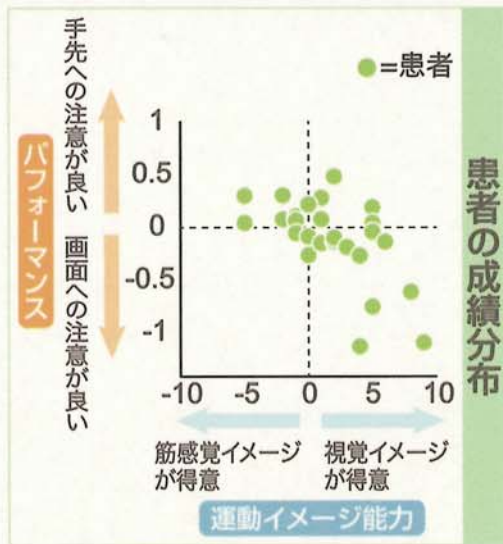
急性期脳卒中のリハビリ

脳機能の特性 見極めが重要

自治医大医学部先端医療技術開発センター
脳機能研究部門の研究グループは、急性期脳卒中患者の運動機能障害のリハビリでより高い効果を得るには「脳機能の個人差の見極めが重要」とする研究成果を発表した。定説では「自分の体の動き以外に注意を向けた方がいい」とされてきたが、万人共通ではないようだ。効果を最大限に得る新たなリハビリプログラムの開発につながる事が期待される。

(外山雅子)

リハビリでは「注意の向け方」が重要とされ、約20年前から「自分の体の動き以外の対象に向ける」ことがよいとされてきた。例えばボールを運ぶリハビリでは、「手の動き」ではなく、「ボールを動かす際の軌道」に注げる」といった具合、明らかにすることに加え、



自治医大脳機能研究グループ発表 「注意の向け方」に個人差

「最適な注意の向け方には個人差がある」との仮説を基に、脳機能の特性を判断する実験を行った。参加したのは脳梗塞もしくは脳出血の発症から平均で11日経過した急性期脳卒中患者で軽度片まひのある28人。

研究グループの研究者 桜田武(たけ)さんは「リハビリ前にイメージ能力評価を行って個人差を見極めれば、より高い訓練効果が望める」と期待する。

脳機能の個人差を判別する指標として、体を動かさずに身体動作を想起する運動イメージ能力に着目した。運動イメージ能力は体の感覚を思い起こす「筋感覚運動イメージ」と、体の動きを映像として思い起こす「視覚運動イメージ」の2通りがあり、簡易的な質問でどちらが得意かを定量化した。

その後、コンピューターマウスを操作してパソコン画面上の円をなぞる運動を、手先の動きに注意しながら行う条件と、画面に注意を向ける条件で行い、パフォーマンスを比較した。

その結果、筋感覚運動イメージが得意な患者の多くは手先に注意を向けることで正確な運動ができ、視覚運動イメージが得意な患者の多くは画面に注意するとパフォーマンスが上がる相関関係を確認。最適な注意の向け方には運動イメージ能力の得手不得手によって個人差があることが明らかになった。

また水泳や陸上など個人競技の経験者の多くは筋感覚運動イメージが得意で自分の体の動きに注意を向ける方が正確な運動ができ、サッカーなど対戦競技の経験者の多くは逆の結果となったことから、運動経験と得意な注意の向け方の関連性についても検証を進めるという。

研究結果は1月、国際科学誌「Scientific Reports」に掲載された。現在、グループは脳機能の個人差をより客観的に評価しようと、前頭前野の脳活動計測による判別に取り組んでいる。



「より効果的なりハビリができるよう研究成果を生かしたい」と話す桜田武(たけ)研究員